

施設の専用駐車場に止まっている捜査車両から二人の刑事が降りた。助手席か降りた刑事がそばに近づいてきた澤田に言った。「通報した事務長の澤田さんはどこに」

「私です」

刑事は澤田のほうに近づいた。刑事は身長が一八〇センチ以上ある大柄な男だった。それに対し澤田の身長は一六〇センチ弱の小柄だった。刑事は見下ろすような姿勢で身分証を見せた。「捜査第一課の加賀谷です」加賀谷は施設に向けて顎をしゃくった。「中で何が起きたのですか」

「奴らが凶器を持って立てこもっているんだ！」澤田が興奮した様子で加賀谷に言った。

「奴らとは」

「うちの利用者三人だ」

加賀谷は訝しげに視線を施設に向けて思った。うちの利用者？ 確かこの施設は高齢者が入る施設だよな。職員の間違いじゃないのか。加賀谷は澤田に尋ねた。「施設にいる高齢者三人が騒ぎを起こしたのか」

「騒ぎなんてものじゃない、人質を取って立て籠もっているんだ！」

「障害のある高齢者が職員をね……」職員は何をしているんだ。相手は障害のある高齢者だぞ。防げなかったのか。加賀谷は両手を腰に当てた。「で、凶器の刃物がどんなものか分かる」

「ナイフと短い刀のようなもの」

「日本刀か？」

「いや、短いサーベルのような……」

「ナイフはどんな物」

「多分、果物ナイフかと」

「果物ナイフね」お前、力づくで奪えなかったのか。「三人とも刃物を持っているのか」

「いや……憶えていません」

「人質は何人」

「えーと、多分……」

なんだ、憶えていないのか。こいつ、恐怖のあまり一目散に逃げ出した口だな。

「三人です」

女性の声で返事があった。加賀谷は声の方に顔を向けた。そこに施設長の上井が立っていた。

「あなたは」

「施設長の上井です」

「あなたも事務所にいたのですか」

「いいえ、事務所に寄ったら利用者の方が刃物を持って……未だに信じられません」

「上井さん。確認ですが、犯人は三人の利用者で人質を三人とっている。そして凶器なんです、あなたが見たのも果物ナイフと短い刀のような物ですか」

「私が見たのは短い刀だけです」

「では凶器を犯人全員が持っているかは不明、ですね」

上井はうなずいた。

「犯人が誰だか分かりますよね」

「ええ、人質も誰か分かります」

「後で犯人の情報を詳しく教えてください。また、その犯人ですが、私が犯人と交渉する際、相手は私の話を理解できますか」加賀谷は高齢者施設に入所している人のイメージが曖昧だった。「その……認知症でしょ」

「そうです」澤田が割り込んできた。「事務所で刃物を振り回す。認知症だからこんな事をするんですよ。連中に話は無駄です」

「いいえ」上井が澤田の言葉を強い口調で否定した。「入所されている方すべてが認知症ではありません。事務所を占拠した三人も認知症状が顕著にでている報告は受けてません」

上井は加賀谷に顔を向けた。「障害はありますが、相手の話を理解することはできます」

「いいや」今度は澤田が上井の言葉を否定した。「俺の顔に刃物を向けて暴言を吐く奴だ。まともじゃない」

上井が厳しい視線を澤田に向けた。「事務長！ あなたに刃物を向けたのは何かあなたに原因があったんじゃないのかしら！」

二人は互いに険しい表情で感情をぶつけ始めた。

長引きそうに感じた加賀谷は口を挟んだ。「言い争いをしている場合じゃないでしょ。では、コミュニケーションは取れる」

「ええ」上井が言った。

「無駄だ！」澤田が吐き出すように言った。

澤田が話しを続けようとしたとき、加賀谷は右手を上げ、澤田の話しを制した。そして上井に尋ねた。「あの三人は過去にも施設を困らせるような言動があった」

上井は即答せず、考え始めた。「いいえ、職員に迷惑をかけるような事はないと思います。ただ」上井の言葉が途切れた。

「ただ？」

「主張が多い方ですね。でも、その内容を考えると……」

加賀谷は言葉を待った。

「私も同じ立場だったら……」

「いかなる理由があろうと、この方法は許されることはありません」

「警部」加賀谷と一緒に捜査車両から降りていた大泉刑事が言った。「本部でラッツが待機してますが、どうしましょう」県警本部から念のため待機させていた凶悪犯罪対応の機動戦術部隊、通称ラッツの支援要請の確認が無線で届いたのである。

「相手は障害のある高齢者だ。それに凶器は分かっているだけで刃物のみ。これでラッツの要請をしたら、署内でいい笑いものになるぞ」

大泉は署内で仲間からからかわれている自分の姿を想像した。「うん、確かに」

「支援は必要ないと伝えておけ」

「分かりました」大泉は車に向かって走り出した。

制服警官が加賀谷に近づいて来た。「警部、正面入り口以外の出入り口二ヶ所ですが、鍵が掛かり中には入れません。その場で待機しています」

加賀谷はうなずいた。「さっ、やるか」携帯電話を取り出した。

事務所の電話が鳴り、皆が電話機に目を向けた。

「きたぞ」佐々木が小久保に言った。

事務所にいる他の者も小久保に目を向けた。

小久保は電話機に近づき、受話器を取り上げ、耳に当てた。

「私は埼玉県警の加賀谷だ。電話に出たのは誰だ」

小久保は何も言わず黙り続けた。

「事務所を占拠している者と話がしたい」

「俺だ」

「名前は」

「どうでもいい」

「人質は無事か」

小久保は座っている女性職員を見た。「まあな」

「こちらは人質の安全を最優先にして考えていきたい」

小久保はコーヒーを飲んでいる秋野を見ながら言った。「それがいい」

「君たちが立て籠もっている理由を知りたい」

「こちらの要求をのんでもらいたい。いや、要求どおり動いてもらう」

「どんな要求だ」

「このような施設制度を作り上げた日本は帝国主義的管理に組み込まれた『利益優先の収容の場』を作り上げ、我々を囲い込み、我々の自由と利用料という名目で財産を搾取しているではないか！　そこにいる一般管理者はその管理秩序を担う『利益優先主義の末端機構』となっている。ここにおいては利用者の利益、権利はもはや幻想にすぎず、そうした管理システムを解体することこそが課題である」

「何？」加賀谷は話の途中から小久保の話に追いついていけなくなっていた。加賀谷は携帯電話の送話口を手で押さえて、そばにいる大泉に顔を向けた。「なんか面倒くさいぞ」

大泉は加賀谷の言葉を理解できなかったが、分かったかのようにうなずいた。

加賀谷は再び小久保に向かって話し始めた。「すまんが、もう少し分かるように話してくれないか。結局何が望みなんだ」

「我らの手でこの欺瞞的施設経営を阻止し、責任者からの謝罪と退任を要求する。そして新しい施設体制において、運営管理のメンバーに我々利用者の代表をその中に入れることを確約すること」

加賀谷は目を閉じて頭を上げて思った。内輪もめかよ。「責任者とは誰のことを言ってるんだ」

「事務長と施設長だ。この二人による謝罪と退任」

「その要求が通れば、幕引きか」

「ああ、カーテンコールでもしてやろうか」

調子に乗るな！　加賀谷は口に出して言いそうになった。「分かった。少し時間をくれ。二人に説明しなきゃならん」

「急げよ」小久保は電話を切った。

佐々木がブラインドカーテンの隙間から外を眺めていた。「見ろ、パトカーや覆面は増えたが、機動隊はいない。周りにいるのは刑事と制服警官だけだ。これじゃ放水もなければ催涙弾も飛んでこない。なめられたもんだ」そう言うと小久保を見た。「で、相手は要求をのんだのか」

「返事待ちだ。素直に二人が首を縦に振ると思うか」

佐々木は鼻で笑った。「あり得んな」佐々木は再びブラインドカーテンの隙間から外を眺めた。見慣れない車が視線に入ってきた。「おい、あれはきっとテレビ局の車だぞ。屋根にデカイアンテナが付いている。やっと来たぞ」佐々木は車から目を離し、小久保に振り返った。「役者が揃ったぜ」

「テレビ局が来たのか」織田が言った。「ここにテレビ局が来たということは、俺達が行っていることがニュースに流れるんだな」

「ああ。俺達の要求がテレビに流れる」佐々木は外の様子を見ながら言った。

「よし、早くテレビ局の奴をここに呼ぼう」織田が興奮しながら言った。

「これから警察と交渉だ。いつになるかわからん」小久保が言った。

「ちょっと待ってくれ！」織田が食いかかるように言った。「何時間もじっと待つなんて俺の性分じゃない！」織田は立ち上がり、歩き始め、事務所から出ようとしていた。

「おい、何をするつもりだ」小久保が言った。

「テレビ局がいるんだろ。テレビ局が事務所に来なけりゃ、代わりに俺が行って話をするまでだ」織田は事務所から出て、正面入り口へ歩き始めた。

「やめろ！」小久保が叫んだ。

織田は自動ドアの前で立ち止まった。自動ドアは開かなかった。「おい！」織田は事務所に向かって大声で言った。「誰か自動ドアの電源を入れてくれ！」

小久保は事務所内から織田のそばに近づいた。「外に出るな！　おい！　織田！」そう言うと小久保は事務所から出ようとした。その時、佐々木が小久保を呼び止めた。

「織田を止めるな。あいつは自分の意思で外に出るんだ」

「外に出れば――」

「あいつだって分かっている。それを知ったうえであいつは行くんだ。なあ、小久保よ」佐々木は一呼吸おいて、再び話し始めた。「あいつの自由にさせよう。あいつも、あんたも、俺も、もう止められるのはうんざりだ。おい」佐々木は目が合った鈴木に向かって言った。「電源を入れろ」

鈴木はうなずくと自動ドアのスイッチを入れた。

外からも織田の動きははっきりと分かり、大泉が加賀谷に向かって言った。「警部、正面入り口に誰かいます」

「ああ、見えている。何をする気だ」

自動ドアが開き、織田が歩き始めた。

正面入り口の周囲にいる警官達は織田の動きを見逃さないよう注視した。

織田は外に出ると周囲を見渡した。警官たちが十メートル位の距離で織田を囲むように身構えていた。

佐々木は正面入り口の外が見える窓に近づき、ブラインドカーテンをわずかに開け、外をのぞき込んだ。織田の後ろ姿と警官達が目に入った。佐々木は窓を少し開けた。

警官の一人が伸縮式の特殊警棒を取り出し、警棒を力強く伸ばした。

織田はその姿を見て、杖を振りかざした。「さあ、来やがれ！ 俺は逃げも隠れもせん！ かかってこい！」

加賀谷は無線のマイクに向かって叫んだ。「警棒をしまえ！」

警棒を持った警官は警棒を腰のベルトに戻した。

「刃物は持ってないようです」警官の声が加賀谷のイヤホンに聞こえてきた。

加賀谷はマイクを使って警官たちに言った。「手荒なことはするなよ。相手は障害を負った高齢者だ」

警官の一人が一步前に進んだ。

「来るな！」織田は杖を警官に向けながら言った。

警官は両手を広げた。「何もしません。近くであなたと話がしたいだけです」

「話すのはお前じゃない。俺が出てきたのはテレビ局の奴と話をするためだ」

「テレビ局？」警官は訝しげに言った。

「それにカメラマンも一緒に呼んでこい」

警官はマイクで警部に言った。「警部、聞こえましたか」

「ああ聞こえた。今からそっちに行く。勝手に何か言うなよ」加賀谷は正面玄関に向かって走り出した。そして走りながら大泉に言った。「ここに来ているテレビレポーターを集めておけ！」

「はい！」

「それにカメラマンもだ」

「はい！」大泉は中継車に向かって走り出した。

加賀谷は織田を取り囲んでいる警官をすり抜けると走るのを止め、ゆっくりと織田に向かって歩いた。

「止まれ」織田が加賀谷に言った。

「埼玉県警の加賀谷だ」加賀谷は冷静な口調で織田に言った。「ここを指揮している」

「お前には用はない。テレビ局を呼んでこい」

「テレビ局を呼んでどうする」

「俺の話をテレビで流す」

「それには上の者の了解がなければ動けない。少し時間をくれ」

「引き延ばしか、俺達を甘くみるなよ」織田は加賀谷から視線をそらし、包囲している警察や報道関係者に向かって叫んだ。「いいかよく聞け、中にいる仲間は元過激派と元特殊部隊の精鋭がいるんだぞ。俺達は最後まで徹底的に闘う」

事務所から外の会話を聞いていた佐々木が小久保に向かって言った。「お前、過激派になっちまったな」

「お前こそランボーになっちまった」

大泉が無線を使って加賀谷に言った。「やっぱりラッツを呼びますか」

「馬鹿かお前は」加賀谷は呆れた口調で返した。たとえ本当だとしても、障害を負った高齢者だ。何ができる。「レポーターは集めたか」

「はい、レポーターは関東放送から来た一名、カメラマンも一緒です。他に新聞社の記者が数人来ています。報道の連中は過激派や特殊部隊の言葉を聞いてざわついています」

加賀谷はため息をついた。報道にとっちゃ興味をそそる言葉だな。

「何をごちゃごちゃ言っている」織田が言った。

加賀谷は織田に向かって言った。「分かった。私が責任を持ってその要求を受け入れよう。その代わりこちらの要求も受け入れてもらいたい。人質の解放」

「解放だと？」

「一人でもいい、人質を解放してくれれば、ここにテレビ局の者を連れくる」

「ちょっと待て」そう言うと、織田は事務所の方へ振り返った。「おい、聞いてるか」

佐々木が窓越しに叫んだ。「耳が遠いんだ。もっと大きい声で言ってくれ！」

「俺の話をテレビ局の連中に話す代わりに、人質一人を解放してほしいとき」織田が大声で言った。

「ちょっと待て」佐々木は小久保を見た。「聞こえたか」

「ああ」

「どうする」

「どうするもない。彼女達に聞いてみる」

佐々木が織田に向かって叫んだ。「ちょっと待て！」

小久保は事務所職員に言った。「警察は織田がテレビ局のインタビューができる条件として、人質一人の解放を求めてきた。分かっていると思うが、警察が言う人質は君達のことだ。君達のなかで一人、ここから出て行ってもらいたい。いいかな」

秋野たち事務職員はうなずいた。

佐々木が織田に向かって叫んだ。「一人出すぞ」

織田は加賀谷に振り向いた。「聞こえたか。一人解放する。テレビ局を早く呼んで来い」

加賀谷はうなずくと、織田の元から離れ大泉とレポーターがいる場所へ向かった。

小久保は松下を見た。「松下さん、テレビ局が来たらここを出て行ってもらいたい」

松下が椅子から立ち上がった。「私……このやり方は良くないと思いますが、ここまできたら、本当の声を世間の皆さんに聞かせてあげてください」

加賀谷はレポーターとカメラマンの前に立っていた。

「話の内容によってはカメラを止めて撮影しているふりをしろ。そして相手を刺激するような質問はなしだぞ。いいな」

レポーターは返事をせず、加賀谷を見つめていた。

「いいな」加賀谷が歯を食いしばりながら念を押した。

レポーターは目を閉じ、大きくため息をついた。「いいでしょう」

「よし、合図の方法は俺がカメラマンの腰を叩いたらカメラを止めろ」

カメラマンがうなずいた。「分かりました」

「ついてこい」

加賀谷はレポーターとカメラマンを連れて織田のもとへ向かった。

三人が織田のもとに近づくと、加賀谷が織田に言った。「人質の解放だ」

織田が事務所に向かって言った。「一人外に出してくれ」

しばらくすると正面玄関から松下が出てきた。松下は加賀谷が指し示す方へ歩き出した。

「これでいいだろ」織田が言った。

加賀谷はレポーターにうなずいた。そしてカメラマンの耳元で囁いた。「腰を叩いたら止めろよ」

レポーターが口を開いた。「関東放送の石崎といいます。あなたはカメラの前で訴えたい

ことがあるとお聞きしました。間違いありませんか」石崎はマイクを織田に向けた。

「ああ間違いない」織田は自分に向けられているカメラを何度もチラ見している。

石崎は織田の動きを見て言った。「このカメラがあなたの話を全国に流します」

「うん」織田はいざ話す段になると、何から話せばいいのか、分からなくなってしまった。「くそっ、何から話せばいいのか分からん」

石崎が助け船を出した。「では、私から質問する形で話を進めるのはいかがでしょうか」

織田はうなずいた。「それがいい」

「分かりました。では始めましょう。まず、あなたの名前は」

「俺か、おれは織田だ、織田誠」

「ここに入所されているんですね」

「ああ、そうだ」

「織田さん、単刀直入に聞きますが、今回なぜこのようなことをしたのですか。施設を占拠するくらいだ。それなりの理由があったと思います。そこをお聞かせください」

「俺は多分認知症だ。でもな、認知症だからこんな事をしたわけじゃない。病気のせいでこんな事をしたなんて報道するなよ！ これは俺の意思で、ちゃんとした理由があってやったんだ」

「その理由を今ここで話ししていただけるんですね」

「ああ、そうだ。よく聞けよ」

加賀谷はすぐにでもカメラマンの腰を叩けるように右手をカメラマンの腰に近づけた。

「あいつはな、俺の仲間を殺したんだ。そして大事なネズミまで処分したんだ」

石崎は、『殺した』の言葉を聞き、息を呑んだ。そしてゆっくりとした口調で尋ねた。

「織田さん、あいつとは誰のことですか。そして誰を殺したのですか」

「決まっているだろ、ほら、あいつだよ、あいつ」

石崎は名前が思い出せないで苛立ち始めている織田を見て思った。彼は認知症により思い出せないのか。それに殺されたのも病気からくる思い込み？

織田は石崎が何も言わず自分を見続けているのを見て言った。「おい、お前。俺の話を信用していないだろ」

「いえ、そんなことはありません」

織田の表情が陰しくなった。「いいや、お前の目を見れば分る。お前の目は他の奴と同じだ。認知症の奴を見る目だ。認知症の奴が言う話しは信用できない。病気のせいでいつも

デタラメなことばかり言っている。そう思っているんだろ」

織田は顔を下に向けると怒鳴り始めた。「畜生！　どいつもこいつも俺を下に見やがって！」

「織田さん」石崎はなだめるような口調で言った。「私はあなたの話を聞くためにここに来ました。あなたの話を信用していなければ、ここにはいません。そしてカメラもね」

石崎は話を止めた。それは自分が伝えた言葉を織田が咀嚼するためだった。

石崎は織田の表情から陰しさが消えていくのを感じ取ると、ゆっくりと話し始めた。「織田さん、あなたが今一番言いたいことを遠慮なく話してください」

織田は石崎を見ると話し始めた。「俺はきっとこのこともいずれ忘れちまうだろう。だからみんなには覚えておいてもらいたい。俺がどんな辛い思いで生きているかを」

石崎はうなずいた。「視聴者の心には必ず残りますよ」石崎は織田の仲間が殺された件を聞くことはしなかった。織田の心情を考えれば、彼の訴えたいことはそれじゃない。

施設内では事務所で起きているたてこもりのことが伝わり、二階、三階の入所フロアでは職員、利用者が食堂にあるテレビの前に集まっていた。そしてテレビに映し出されている織田の様子に目が釘付けになっていた。

「織田さん、カメラの向こうであなたの言葉を待っている人が大勢いますよ」

「俺はこんな所で生活するために頑張って生きてきたわけじゃない。高校を卒業してがむしゃらに働き、競争社会の中で生き抜くために仕事ばかりの生活をしてきたんだ。当然家族のために死に物狂いさ」織田は話すのをやめた。やがて織田の唇が震え始めた。「それがどうだ！」吐き出すように言った。「血と汗を流し頑張って生きてきた結果は病気になり施設に入って自由がない生活を送らされているんだ！　これが公平といえるのか！　お前たちは公平と考えているかもしれないが、俺は心から不公平を感じているんだ！」織田は大きく息を吸い込んだ。「普通の自由だ！　ここには世間の当たり前の自由がないんだ！」織田は杖を振り回しながら叫んだ。やがて振り回していた杖が真上を指した状態で止まった。織田は目を閉じてうつむいた。「俺だって好きで病気になったわけじゃない……」その声は今までの力強い声とは違い、弱々しい声だった。織田は杖をゆっくりと下ろし、地面に着こうとしたが、杖が窪んだ場所に着いてしまい、体のバランスが崩れ、そのまま倒れ込んでしまった。

警官達が織田に向かってゆっくりと静かに近づくと織田を取り囲んだ。

織田はゆっくりと体を起こし、着座の姿勢をとった。顔はうつむき目は閉じている。

やがて怒鳴り始めた。「一体俺はどうすりゃいいんだ！　俺はどうすりゃいいんだよ！　くそお！」そして織田の声から力強さが消え、すすり泣く声に変わり始めた。「ちくしょう……ちくしょう……」

加賀谷が石崎とカメラマンをゆっくりと織田から遠ざけた。

警官の一人が片膝をつき、織田の肩に触れた。「あなたの気持ち、十分に伝わりましたよ。さあ、立ちましょう」

織田は警官の手を借りながらゆっくりと立ち上がり始めた。別の警官も手を差し伸べ、織田の体を支え、立ち上がった織田に杖を渡した。

テレビカメラは、織田が警官に支えながら連れて行かれ、姿を消すまで映していた。

二階の食堂に集まっていた職員と利用者達はテレビに映し出されていた織田の映像を固唾を呑んで見つめていた。

ここで映像は石崎を映し始めた。「今、たてこもり犯、いや、織田さんが警官に支えられながら歩き去りました」石崎は犯人と逮捕の言葉は使いたくなかった。事実、たてこもり犯の一人が逮捕されたのであるが、織田の心情を聞いたすぐには、その言葉を使いたくなかった。「いったんスタジオに戻します」

二階の食堂でテレビに映し出された織田を見ていた女性利用者が言った。「あの人、織田さんでしょ。逮捕されたのかしら」

「いいえ」日野がその利用者のそばに近づいて言った。「疲れた織田さんをゆっくり休める場所に案内したのよ」そう言うと日野が笑顔を作った。「大丈夫よ、すぐここに戻って来るわ。今までとおりの元気な織田さんでね」日野は視線をテレビに戻した。「なんでこんなことを。なにも事務所を占拠しなくても……織田さんの馬鹿。でも……」日野の唇が震え始めた。「でも、そうよね、誰も好きで病気になった人はいないよね」日野の頬に一筋の涙が流れ落ちた。「きっと何度も悔しい思いをしていたんだよね。それを気づかないで……ご免ね……ご免ね……」

食堂にいる利用者、職員たち何も言わずテレビを見続けていた。まるで皆が織田の訴えを心の中で囓みしめているかのようだった。